

ほととぎすの異稱げにさまざまにて、藻鹽草に列ぬるこの鳥の數二十にもあまれり。中にくきらといへるは、佛經に見ゆる拘耆羅にほかならで、ただ眞名を假名に改めしのみと見ゆれば、これもと梵語コーキラに由れることさらに疑ひなし。印度の樹林に宿るこのコーキラ鳥、その聲高く澄みてきよなることただならず。また異ものに養はるるを言へるパラブリタ、アニャブリタの名さへあるは、わがほととぎすにひとしく、あだし鳥の巢におのが卵を産みつくるを性とせるがゆゑなるべし。さればコーキラとほととぎすとつゆ異らずとまでこそ言ひがたけれ、同じ品の鳥と思はではあるべからず。

コーキラの鳴く音いとめでたければ、その聲やがて鳥の名ともなりてピカと呼ぶことのあるは、あたかも鴉をカーカと言ひ、雞をクツクタと言ひ、犬をクツクラと言ふにひとしく、いはゆる擬聲語にほかなきなり。

このピカ鳥、その色としては黒ずみて形また見目よからず。さればそのめでたき初音を聞かばこそあらめ、つねはカーカと姿とみにもえ分ちがたきぞあいなき。これにつきてはかの國に俗諺ありて云へらく

カーカは黒くピカ黒ければ、ピカはカーカにまぎらはし。

されど春立ち鳴く聲聞けば、カーカはカーカ、ピカはピカ、と。

五天竺の風流人士コーキラを愛でてやまず、美姫の歌聲をこの鳥の鳴く音になぞふるを習ひとすれば、これまたかの國人にとりて風雅の種とぞなりぬなる。

本朝にてもくきを歌に詠めるためしなきにあらず。源俊賴のものせし

これ聞かむこせのさやまの杉が上に

雨もしののにくきら鳴くなり

といへる一首、散木奇歌集の夏の部に入りたりとぞ。

(令和元年十二月十七日受附)

